

『日本アジア研究』第17号（2020年3月）

リプロダクティブ・ライツの剥奪

——ハンセン病問題「本妙寺部落狩込み」「湯之沢部落解散」再考——

福岡安則*・黒坂愛衣**

福岡が2003年に「ハンセン病問題に関する検証会議」の検討会委員を委嘱されて以降、黒坂とともに、ハンセン病回復者、その家族からの聞き取りを精力的に実施してきた。国の誤った政策により苦難の人生を歩んだ人たちの語りを記録に残すことは、社会学者のなすべき仕事のひとつと考えたからだ。一定の問題事象をめぐって聞き取りを積み重ねていけば、ある段階で、あらたに得られる新しい情報はなくなり、「知識の飽和」状態に達すると思われがちであるが、「ハンセン病問題」での当事者の聞き取りが500人を超えて、なお、まったく新しいライフストーリーに出くわす。

本稿で紹介する2人の女性は、2016年に始まった「ハンセン病家族集団訴訟」の原告となった人たちである。

2018年12月、大阪市内の弁護士事務所でNA（女性、1934年10月生まれ、聞き取り時点で84歳）から話を聞いた。彼女は、1940年7月9日、熊本の「本妙寺部落」が官憲によって狩込みを受けたとき、そこに5歳の女の子としていた人である。ハンセン病罹患患者であった両親とともに、群馬県草津の栗生楽泉園に送られ、その附属保育所に収容された。

2019年4月、関西のある駅近くのカラオケボックスでKS（女性、聞き取り時点で79歳）から話を聞いた。彼女は、群馬県草津の「湯之沢部落」で1940年3月に生まれている。両親がハンセン病罹患患者であった。1941年5月18日に「湯之沢部落解散式」が举行された半年後、両親とともに瀬戸内海の長島愛生園に移り住み、KSは愛生園の附属保育所に入れられた。1歳半のときであった。

この二人は、ハンセン病罹患患者ではないが、ハンセン病療養所附属保育所に収容されるという《もう一つの隔離》の体験者である。それだけではない。この二人の語りは、熊本の「本妙寺部落」にしても草津の「湯之沢部落」にしても、ハンセン病罹患患者とその家族たちが助け合ってコミュニティを形成し、そこで自分たちの意志で子産み子育てをするという《リプロダクティブ・ライツ》を実践していた空間であったことを如実に示している。国の強制隔離政策は、単に患者を《隔離収容》しただけではなく、かれらから《リプロダクティブ・ライツ》を剥奪する企てとしてあったことが了解されよう。

キーワード：ハンセン病家族、隔離政策、附属保育所、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

** くろさか・あい、東北学院大学准教授、社会学

本稿はJSPS科研費18K02003および19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。なお、文責は言うまでもなく筆者自身にある。

「本妙寺部落狩込み」を体験した NA の語り

NA は 1934 年 10 月 1 日生まれ。2018 年 12 月の聞き取り時点で 84 歳。

問わず語り

私はいま息子と同居してますねんね。草津〔の栗生楽泉園〕に父の友人が平成 15 年まで生きてはったから、子どもたちを連れて何回か行きましたわ。〔だから息子も〕群馬のおじさんが入ったところがハンセン病〔の療養所〕というのは薄々知ってるんちがいますか。〔私のほうからは子どもたちには〕言ってませんけどね。そやけども、おじさんは、手が変形（あれ）してたからね。まあ、〔本人は〕「凍傷でこないなった」いうて〔偽りの説明をして〕ましたけどね。

そのおじさんは亡くなりましたけど、〔栗生楽泉園には〕1 人、私の同級生がまだいてますねん。あそこの保育所で同級生やった人。〔病気になって療養所の〕中に入ってんねん。その人、〔園内の〕教会のお守りしてますねん。中村教良（のりよし）さん¹。まだお元気かなあ。〔手紙を〕出してね、「手があかんから、葉書もよお書かん」言うてはりましたわ。私、この〔家族訴訟のための〕書類とか、いろいろ中村さんをお願いしてね。ほれ、父親の、何年に入ったとか、何年に亡くなったとか、在園期間がなんぼあったとか、そういう書類が要りますわね。それを中村さんをお願いしてね。だから〔手続きが〕早くできたんです。おかげさんでね。中村さんは、私のことをよく覚えていていただいてね。「一緒に A ちゃんと勉強したやーん」って言うてね。同い年です。草津の保育所でね。

物心ついたのは本妙寺部落

〔物心ついたのは熊本の本妙寺部落でした。〕そこは〔親子で〕一緒に暮らしてたからね。平屋の長屋に。〔私以外にも子どもたちがいました。名前も〕うっすら覚えてますよ。真謝（まじゃ）ヨネちゃん。〔あと〕ヒデちゃん。なにヒデ子やったかな、あの人も、沖縄の名字やからねえ。で、大湾（おおわん）チエコさんという人がいてましたわ。あの人も〔草津に〕一緒に来た。

本妙寺（あすこ）〔の石段のどこ〕で、上がったり下ったりしてよお遊んでました。七五三のとき、賑わうからね、あそこ。みんな着飾って、あれしますやん。私も連れてってもらったような記憶がありますわ。着飾ったんかは知らんけど、コッポリ履いたんは覚えてます。

〔お父さんの仕事？〕いやあ、なんかわかりませんね。お坊さんみたいなことしてたんちがうの。お参りに行ったりしてるいうてたから。お母さんは、もう、全然ダメやわね。〔当時から〕義足だったかもわからへん。だから、あんまり私を育てられへんから、隣の人が育てたいうてました。

私は〔じつは〕両親のほんとの子どもではないみたいですわねん。どっかからもらってきたみたいや。だってもう、お母さんの年が、子どもを産むような年じゃないもんね。チラッと聞いたけどね。どこかからもらってきて、父が自分の籍に入ってる。もらった先とかは全然書いてない。で、お母さんも籍入ってなかったですわ。〔父とは内縁関係。〕この〔裁判の〕書類つくるのにね、母の戸籍謄本とか要りますやん。〔鹿児島県の〕役場に、いろいろね、あれしてもらったけど。お父さんは岡山〔県出身〕です。お父さんとお母さん、どこで知

り合ってるのかねえ。お父さんが全国ぐるぐる回ってたから、どっかで知り合ったんでしょうね。

本妙寺部落(そこ)はね、やっぱり、よそから見たら、特殊な、部落やからね。ちょっとしたことでね、[私] 石を頭にぶつけられて[すごい血が出て] ね。昔は医者なんていてませんやん。[お母さんが] ニラを鎌で刈って、すり鉢で搗(す)って、それを血止めに、ここへ載せたんを覚えてますねん。

昭和 15 年 7 月 9 日の狩込みで栗生楽泉園の保育所へ

〔昭和 15 年の 7 月 9 日のこと〕覚えてます。朝早く、バァッと一斉にね、叩き起こされたいう感じやわねえ。ほんで、ダァッと、トラックにみんな乗せられてね。「乗れえ！」みたいな感じちゃいます。着の身着のまま乗ったと思いますよ。で、押し込められて、真っ暗やからね。幌みたいなのが付いてるし。ぜんぜん外は見えませんか。私はもう、親のところにじっと、こうやってるだけやからね。ほんで、着いたところが草津。[私の記憶では、菊池恵楓園の前身の九州癩療養所には] 寄ってないと思いますわ²。まっすぐ草津に来たと思いますわ。

もう、そのトラック、いっぱいやから。ギュウギュウ詰めやった。まあ、40 人は乗ったと思いますよ。私以外にも[子どもが] いましたよ。ヨネちゃん是一緒やったと思うわ。[それと] チエちゃんと、ヒデちゃんという子。あつ、安次嶺(あじみね) ヒデ子や、思い出したわ。沖縄の人。一緒に草津に来たんやわ。草津から[長島] 愛生園の保育所にも一緒に来た。ちょっとのあいだ、ヒデちゃんとヨネちゃんは[愛生園の保育所に] いてたような気がしますわ。で、すぐ、沖縄のほうへ行っったと思います、二人はね。すごいなくなったからね。

〔栗生楽泉園の保育所のときは、療養所の親との〕面会、ものすごく厳しかったですわね。面会の日が決められて、こう、向かい合って、しよるような記憶があるんですけどね。[そういうかたちで] 何回かは[会えた] けど、ほとんど会えてないと思いますわ、草津ではね。

私が一回ね、赤痢かなんかになったんですわ、保育所でね。で、隔離されたんですわ。それ、覚えてる。ほんで、それがお母さんの耳に入っったのかなあ。赤痢は命が危ないからね。あとで[楽泉園でのお父さんの友達の] オダさんに「ばあさんが『A が死によるわあ』言うて、大きな声で喚いてたあ。『はよ、行って、見てこないかあん』」いうの聞いたんやけどね。

〔附属保育所には子どもたちが] 50~60 人いてたんじゃないですかあ。岩田たまさんという人が、そこの保育所の主任(しゅちょう)さんでした。[保育所での不公平な扱いは] あんまりなかったと思いますわ、草津はね。[先生に] 苛められたとかそういうのはなかったですわ。愛生園のほうは、すごいひどかった。

〔楽泉園の保育所の〕食べ物、そんなに悪くはないですよ。炊事場に赤川さんというおばちゃんがいってね、よおしてたと思うわ。岩田さんという人が、なかなかの人やったらしいからね。そんなにひもじい思いはしなかったと思いますよ。けっこう、よお遊んだわ。あそこは、トンボやとか、そういう自然がね、あったからね。もう、雪で、雪で、冬はね。藁沓(わらぐつ) 履いて、学校へ行ったの、覚えてる。ちょっと坂あがってたら、分校があったんや。学校の先生が、また、もう、戦時中で、きつい、きつい、先生やったわ。なんせ、怖かったわ、軍隊の先生がおって。若い兵隊さんみたいな人がおってん。

〔分校には〕小学校2年生か3年生ぐらいまで行ってたんちゃうかなあ。私、3年生の中途か4年生ぐらいで、愛生園のほうに行った。愛生園はね、〔本妙寺〕部落の〔隣にいた〕ムタさんという人が愛生園に〔連れて行かれて〕いたから、うちの父も愛生園に行きたかってん。ほんで、愛生園に行きたいという願いをずっと出してたみたい。お母さんは、もう、そのとき亡くなってると思うねん。早く亡くなったみたいやけどね³。ムタさんも「こっち来たらいい」って言うてたんちゃうかな。で、〔なぜか〕子どもの私だけが行くことになって。お父さんは許可が出なかったんです。〔そのとき〕真謝さんと安次嶺さんらは〔愛生園へ〕来たんやけどね、保育所に。〔そして〕すぐ〔沖縄へ〕行っちゃったからね。

〔保育所にも引かれていた〕温泉は好きでしたよ。硫黄の温泉。臭うけどね。〔子どもが〕1人、亡くなってね、あそこで。ハルミちゃんいう人でね。溺れて。私がかわいがってた子。私より下。覚えてるわ。〔あそこのお風呂〕けっこう深いからね。そやけども、そんなん、誰も言わへんもんなあ。そんなこと言うたら、大事（おおごと）になるから。

〔お風呂があったのは〕保育所の裏ですね。こう、通って行って、右側に台所があつて。ずっと、廊下があつて。その向こう側に、洗濯物を入れる乾燥室。うちら、よお、用事させられたもん。冬にね、おむつとかを干すの、お手伝いさせられた。まだ小学生の、小さいのにやねえ、廊下掃除とか順番でさせるわけでしょ。冬になったらね、ガンガンガン、乾燥室、焚くからね。それで、洗濯したやつを干さなあかんねん。「今日はおむつ干しや」いうて、したの覚えてますわ。おむつを干してるいうことは、赤ちゃん、いてたと思いますよ。

私は3年生か4年生ぐらいで愛生園へ行ってしまったからね。まだたくさん残ってて。そのときは、中村さんもまだいてたんじゃないの。中村さんは、いつ行ったんかなあ、〔療養所の〕中に⁴。

お父さんも〔当時〕、もう、年やったからね。オダさんの話ではね、「Aのとこへ行かにやいかん、足を鍛えにやいかん言うて、毎日毎日、こうやって足、運動してた」言うてたけどね⁵。

長島愛生園の附属保育所暮らし

〔長島愛生園の附属保育所は〕ひどかった。食べ物はない。〔そのうえ〕差別がひどかったな。〔先生の子どもの〕好き嫌いがあるの。〔保育所の〕主任（えんちょう）、ひどいのよ。藤田さんいうてね、すごいやり手だった。女性。〔保育所の先生は〕みな、女性や。あのね、はしかい（＝すばしこい）って言うんかな、ちゃっちゃっちゃっちゃする、目立つ子は嫌いなんです。おっとりした子が好きなんです。おっとりした人はね、みな、かわがられて。藤田のおかあさんは、厳しかつてん。おしっこする子なんかがおってね。寝小便。そういうのは、ものすごい厳しかったわなあ。

で、毎日毎日が畑やからね。畑を教えに来る人がいてましたんや。虫明のほうからね、オザキのおっちゃんいう人が教えに来てましたんや。ほれで、保育所の畑ね、野菜の植え方とかあれとか教えてたわけ。〔私ら〕開墾からやらされてん。開墾ばっかし、毎日毎日。しんどかったよ。小学校の、4年生、5年生、6年生な。保育所はね、自給自足ですわねん。だから、開墾して。カボチャを植える。トマトを植える。食料になるようなもの、なんでも植える。サツマ

イモとカボチャは、とくに植えたわね。麦も植えてました。寒(さぶ)いときに、麦踏み、やらされたん覚えてるもん。ほで、人糞(じんぷん)でしょ、その頃〔の肥やし〕は。担桶(たご)というのがあんねん。おんなしぐらいの背の子と組まされてな。あれを天秤で山の上まで運んで行かされんねん。たまに、背がちぐはぐでもね、させられるねん。困るねん。もう、ザーッと、担桶が滑るから。もう、嫌やったわあ、ほんまに。

自給自足やから、山羊も豚も飼うてたな。鶏(にわとり)の餌やり一緒にした人、いまも、いますよ、大阪に。私よりだいぶ上やけどね。その人の補助みたいに、朝早う起きて、菜っ葉を刻んで、餌つくる。たくさん飼(こ)うてたからね。豚はまた、豚の餌をあれする人がいてね。残飯をね。で、小麦とか大麦、できますやん。そしたら、麦踏みしますねん。石臼みたいに、二人でね、ガチャンガチャンとやるわけや。あれも嫌やった。もう、重労働ばっかり。

〔学校は島のなかの〕分校。先生がしょっちゅう替わってたわな。どっから赴任して来る先生(ひと)もいれば、官舎の人もいてましたよ。官舎の人ね、薬局の薬剤師のお嬢さんがね、体育とかね、教えてくれはった。〔私が中学校へ行くときは〕新制中学になったんや。鹿児島から来はった男の先生、いい先生やった。〔先生が〕いっぱい遠くから来てはんねん。

〔ハンセン病になった子どもたちの行く学校は、療養所の中に別に〕あったみたい。〔第二分校。私たち保育所の子どもは、第一分校。〕官舎の子たちは〔船に乗って〕裳掛小学校〔の本校〕に通ってたんや。で、お医者さんの息子さんとかは、もっと違うとこね。私、〔中学を終えたあと〕県の児童課長さんしてたとこに女中奉公に行ったからね。そのときに、島の医者(せんせい)の子どもさん、そこに預けて。そこから岡山〔市内〕の小学校へ行かしてたもん。〔当時〕お医者さんの子どもさんやとか官舎の人らの子どもは、明らかに、私らとは人種が違うんやと思ってた。

〔「らい病」が恐ろしい病気だってことを知ったのは〕やっぱり、愛生園へ来てからですな。〔私ら、光田氏反応の検査〕やられてますがな。毎年やられたんちがうかな。痕がいっぱいありますよ。これ、消えしませんがな。だから、夏に〔二の腕〕見せる服、着られへん。みんなに「それ、どしたん？ どしたん？」聞かれるから。ブカァっと穴が開いてね。ここにも開いて、ここにも開いて。「光田氏反応して、感染してるかしてへんか調べるんや。みな、せないかん」というのは、うちら聞いたけどね。私なんかの年代の子はぜんぶやられてるんちがう。〔そういう検査を受けていたから、いつか、自分もこの病気が出るんじゃないかというふうに、ずうっと〕思っていましたよ。あすこにおるあいだは、いつも恐怖やったわなあ。高校生になっても、そういう恐怖はありましたね。

大阪の白鳥寮へ

〔愛生園の〕眼科の先生のお母さんが県の児童課長さんしてたんや。偉いさんや。息子さんをお医者さんにするぐらいの人やから、偉いわなあ。〔園内の中学を終えたあとは岡山市内のそのお宅に女中奉公。〕そっから夜学に行かしてもらった。定時制〔高校〕。〔そやけど〕お嬢さんがいてはってん。その娘さんに縁談があったんじゃないですか。それで、私、「大阪の白鳥寮に行きなさい」って。

白鳥寮にも〔愛生園の附属保育所の〕藤田先生のね、第一の弟子みたいな人が来て。それも差別が激しい人でねえ。私らはもう、いい印象ないわ、どの先生も。あの先生よかったな、いう先生はいない。白鳥寮も先生が3人ぐらい替わりましたわ。〔愛生園の〕保育所から白鳥寮へ移ってくるわけですよ。〔愛生園の〕保育所がなくなったからね。その人らが白鳥寮の先生で来ますやん。寮母さんみたいにね。それがまたね、好き嫌いの激しい人ばかりでね。どういうんかなあ、嫉妬心は強いし。男の子はものすごいかわいがるねんけどね。女の子で、私らみたいな、夜学に一人でも行こうかあいうような子は嫌いやねん。なんでもフンフンフンフンいう、おとなしい子は好きなんや。ほんで、韓国の子はまた、ものすごい嫌われたわな。いじめられたわな。

大野〔悦子〕先生いう先生がいてね。もう、チョークがボーンと飛んだりな。答〔むち〕で、よお叩かれてた子おったで。私らは叩かれへんけども、台の上でバチーン、バチーンってしはんねん。よお忘れんわ。そんな時代やってん。いまそんなことしてごらん、えらいこっちゃあ。PTAが黙ってへんがな。

私、働きながら〔定時制高校へ通ってるとき〕結核になった。〔白鳥寮の〕掛かりつけの阪大〔病院〕のお医者さんのお世話で、半年ほど、山の奥の療養所に隔離。大阪府能勢〔のせ〕町に大企業の隔離病棟があったんですよ。その住友病棟に入ったんやけどね。私、ほら、昼間は薬品会社で働いてて、社会保険があったから〔入院治療費〕タダやってん。

〔私が働いていた薬品会社の〕社長さんがいい方でね。私、社長さんに「うちの寮の子どもらが修学旅行へ行きたいんやけど、お金が一銭もないから、ちょっとアルバイトね、1ヵ月でもさしてもらえませんか。3人ほどおりますねん」言うたら、雇ってくれはったよ。そんな奇抜な方もいてはりましたわ。

まあ、だけど青春時代は、ほんとに暗い青春時代やったね。その時分「ハンセン病」なんて言いませんやん。「らい病、らい病」言いましたんや。そんな話、横で誰かがしてるのでも聞いたら、ドキッとしてね。ちょっとでも「あの人、親戚にらい病がおるらしいで」いうような噂があったらね、もう大変なことになりますやん。いまでこそ「ハンセン病」とかね、そんな横文字の名前があるけどね。その時分はもう「らい病」一本や。〔そやから、両親がハンセン病だったいう〕話〔人に〕したら、もう絶対あきませんわな。

〔二十歳の頃、勧められて見合いしたけど、まとまりかけた話が〕あかんようになったな。見合いした人、栃木の、田舎の人でしてん。中学校卒業してね、集団就職じゃないけど、〔社長さんが〕おいで言うたんちゃいますの。そこへ勤めてて。ほで、ある人の紹介で、「田舎の子で、真面目やから」いうて、お見合いしたんですけどね。親はちゃんとした人でね、そんな話がまとまるんやったらって、さっそく〔大阪に〕家を買ってくれたんですよ。〔でも〕社長さんが「あかん」言うたんやて。なんか知らんけど、社長さんが私のこと調べたんちゃいますの。私が、ほれ、親もきょうだいもいてないいう自体がもう、おかしいと思いますねん。社長さんが「あかん」言う〔のに逆らっ〕たら、その人も会社におられへんことになるしね。それっきり。

〔私は結婚は諦めていたけど、結核療養所へ入院してた人と知り合って。うちの〕旦那の家も貧しかったですわね。ほれで、義父（おじいちゃん）が一人、いてはって。「自分とこの家は、あんたみたいに苦労した人じゃないと勤まらへんから、来てくれ、来てくれ」って、すごい言われて。まあ、あの人も私も〔同

じ結核という〕病気の経験もあるしね。〔結核も〕嫌われる病気やからね。〔相手の人は〕韓国の人。日本名やったけど、おじいちゃんがね、もう、バリバリのね。だから、〔相手の人が韓国人だということは〕わかってました。おじいちゃん、また、いい人でしてん。

主人は、働くのは働くけど、長続きせえへんねんね。どういふんかなあ、人に使われるのが好き（あれ）じゃない人でね。自分から何かしたい思う人やったね。結婚してから、塗装の会社を立ち上げてね。そやけど、オイルショックであかんようになったんや。あの人、昭和4年生まれ。韓国人いうので、私以上に苛められてね。話聞いただけで涙出たことありましたわ。そういう逆境のなかに育った人やからね。まあね、そういう人と縁があったんやね。おたがいに、ハンデキャップあるしね。〔主人には〕結婚間近な女の人もいてはりましたんよ。主人とおんなし国の人でね。それも、なんか、破談になってね。まあ、おじいちゃんがネックでしてん。主人のお父さん。明治生まれでね。その人も、むこうから渡ってきて、相当苦労した人でね。で、うちの主人は、お母さんが早く亡くなったからね。おじいちゃんが再婚した継母（ひと）と、ちょっと合わへんでね。学校卒業してすぐ、横浜のほうへポーンと出ていってね、長いこと帰ってこなかったらしいけど。まあ、おじいちゃんね、一人ほっとくわけにいかへんし。その継母（おばあちゃん）が出て行ったから、〔大阪へ〕帰ってきたみたいですわね。それで、韓国の人っていうのはすごく家柄を調べるんですわ。けっこうね、おじいちゃんの家柄はいい家柄ですわね。家柄がいい割合に貧乏でしょ。ほんなら相手は、なんぼ家柄がよくても、貧乏やし、ああいふ頑固なおじいちゃんがおったら娘はやられへん。そういう考えなんですよ。それで〔結婚が〕むつかしかったみたいですわ。だからもう、全然、異色の、私でも……。おじいちゃんは、はじめはね、いい顔しなかった。「どこの馬の骨か知らんもん、連れてきた」言うてね。

婚姻届、できなかったんですわね。韓国（むこう）の方はね、だいたい、こっちに住んでる名前と、本籍の戸籍に載ってる名前とね、違うんですよ。〔外国人〕登録証〔の名前〕と〔本国にある戸籍上の〕本名とが違ったから、婚姻届が受け付けられなかったんや。こっちで登録を作るときに、勝手に名前を一字、変えはったらしいわ、おじいちゃんがな。だから、それがまあ、よかったんですわ。子どもらみんなね、私の籍、名乗ってるから。〔日本国籍に〕なってるからね。

私の娘がね、結婚するときも、「おかあちゃん、親の釣書（つりがき）、もってこい、言われてんねんけど」って言うて。「〔母親の〕親もおらへんし、親戚（あれ）もおらへんし、きょうだいもいてない。おかしい」いうて。それで、「死んでおらへん言うて、あかんいうたら、もう、やめときいな」って言うたんやけどね。ま、田舎の、うるさいとこに行ったやん、うちの下の娘ね。〔父親が在日韓国人だってことは〕言わなしょうがないですやん。だから、〔むこうの〕田舎はびっくりよ。息子、長男やのにね。跡取りでしょ。でもまあ、我慢（あれ）したんちゃう。条件のんだからね、むこうがね。まあ、よかった。〔娘の〕旦那がいい人で、やさしいからね。

〔子どもは〕4人いてたんですけどね。女2人、男2人。女の子が1人、若いとき、ガンで亡くなってね。長男は東京。で、二男と一緒に住んでますけどね。孫3人、一緒に住んで、賑やかでね。二男の嫁さんも〔義父が韓国人だと

いう] そういうの、みんなわかってる。[でも、私の両親がハンセン病だったことは秘密。] それはもう、[結婚相手の] 親がそんなこと聞いたら、ほんまに、えらいことやわ。私、「小さいときに親死んでるから [なにも] 知りません、知りません」で通しましたわ。

白生会の初代会長

〔長島愛生園附属保育所の同窓会は〕白生会というのね。私が初代会長や。私が率先して、何回もやりましたよ。あそこ出てきてる人ら、後輩もぜんぶ、連絡とれるところは連絡 (あれ) してね。2 年に 1 回、ホテルに会場を借りてね。1 泊して。

〔みんな〕きょうだいみたいに育ったからねえ。何年も一緒に生活して。だから、いまでも「ちゃん」付け。とっくみあいの喧嘩したことも、懐かしい思い出ですねん。そういう思い出、外部の人は考えられへんわね。そういう絆っていうんかね。いまはもう、私は腰も悪いし [集まりに出られませんか]。

「湯之沢部落解散」を体験した KS の語り

KS は 1940 年 3 月 16 日生まれ。2019 年 4 月の聞き取り時点で 79 歳。

草津の湯之沢生まれ

私、1 歳半で岡山〔の長島愛生園の附属保育所〕に来てるんですわ。その前は、〔群馬県の〕草津に親が二人ともおって、そこで私は生まれたみたい。〔戸籍上では出生地は、母の本籍地の〕三重県になってるけど、生まれたのは、たぶん草津やろうと思うわ。ほんで、その〔湯之沢〕部落がなくなるときに、お父さんが、草津は寒いから、岡山のほうに行ったら温 (ぬく) いから、私も幸せやろうということで、そんときに何組かが岡山に行ってるわけなんですわ。だから、私は全然わからへんねん。1 歳半やからねえ⁶。

〔私、きょうだい〕いてへんねんけどね。ほんとは、おってんけど。どういうんかな、あのときに岡山〔の療養所〕に入ったら、おながが大きかったら、墮胎せにやいかんかった、無理やりに。〔保育所の〕みんな、きょうだいがおって楽しそうにしてるんやけど、私はきょうだいがおらんから、ひとりぼっちやからね。で、きょうだいほしいなと思ってたけども、おらへんもん、しかたがないしね。〔のちになって〕お母さんが「あんときに墮 (お) ろさんかったら、よかったけどなあ。もう、どうしても墮ろさにやいかんしねえ」って、それ言うてくれた。「ほんまは、弟がおってんけど、墮ろさなあかんから、墮ろしたんやあ」って言って、親もあれやったしね。かわいそうやけどねえ。——〔その話は、中学〕卒業したりなんかしたときに、愛生園 (あすこ) へ面会に行ったとき聞いた。

病気だった両親のこと

お父さんは東京〔の出身〕。〔両親はちゃんと〕入籍してました。お父さんのほうが年下で、お母さんが年上。〔三重県の母の実家には〕おばあさんがおって、「遊びにおいで。遊びにおいで」っていうから、中学生になったくらいに行ったことある。〔でも〕行っても、〔なにも〕喋られへんもんねえ。おばあさ

んやら、おじさんやら、おじさんの奥さんは〔親切に〕してくれるけど、「お父さんはどないしてんの?」「お母さんはどないしてんの?」って、いっさい言わなかった。〔私の両親の病気のこと〕知ってる〔だけに〕。私、聞かれたら〔どうしよう〕って、ビクビクしてた。〔そのとき〕お母さんの弟がおばあちゃんのところに遊びに来て、「この子、どこの子やあ?」って言うたら、おばあさんが「あれやで、〔あんたの姉さんの〕子や」って言うてん。ほんなら、私にいろいろと聞くのよね。でも、もし〔ほんとのことを〕言うたら、おばあさんところに迷惑かかるから、黙あって、なんにも言わへんかった。「なんじゃ、この子は! 変な子じゃのう!」って。

〔東京の〕お父さんとこは、〔父の〕姉さんがおって。散髪屋を、ちょっとあれしてたらしいけど。あ、そうや。姉さんところに迷惑かけてみたい。〔父が〕病気で仕事せんと、ぶらぶらしてて、姉さんにお金もろうたりなんかしたから、姉さんにも嫌がられて、みんなに嫌がられてたんちがう。だから、東京〔の父の実家に〕は行ったことないんですわ。ほで、いちばん心残りになったのは、私が、どこやったか勤めたかなんかのとき、あつ、もう、子どもがおったときやわ、「遊びに来たらあ」って言うて、〔長島から〕お父さんが〔うちに〕一回だけ来た。そんなときに、奈良のほうに、お母さんに会いに行くんやね。おばあさんやね、私にしたら。私も〔一緒に行って〕どんなおばあさんか会うたらよかってんけど、やっぱり、お父さんと一緒に行く気せえへんし、もし、なんか聞かれたら嫌やと。そのときは、〔父の〕きょうだい同士で集まるときみたいやったわ。〔結局〕どんなおばあさんかわらん仕舞い。あんときに行く言うたらよかったなあと思ったけども、もう、後の祭りや。隠そうと思うから、よけいに、そういうふうなときにふんざりがきかへん。

愛生園の保育所暮らし

〔物心ついたときには、長島愛生園の附属保育所にいたんや。〕戦争が終わって、礼拝堂のところで、天皇陛下の〔玉音放送の〕話を聞いたときに、患者さんらがみんな泣いてて。ほんで、なんで泣いてるのかなって〔思ったのは覚えてる〕。で、戦争がすんだときに、食べ物、どういうたらしいんかな、自給自足やったからね、あそこは。小学校1年生のときはなんにもせんでもよかってん。2年生のときも、あんまりせんでもよかったんちがうかな。3年生になると、ちょっと上になるから、畑仕事とか、草取りとか、肥汲みとか、あんなんやらされた。肥担いで、坂の上のほうに登って、肥溜めに入れるのよね。

〔私たちの通う裳掛小学校の第一分校は〕保育所の下にあった。〔官舎の子どもたちはそこで勉強しなかった。船に乗って〕虫明に行った。〔私らは勉強よりも〕草取りやら、畑仕事やってた。〔私、愛生園の保育所にいるあいだ〕最後まで農作業してた。はじめは、なんか、指導する人がおって、その人に付いて子どもらがしてたけど、ちょっとあれしてから、専門的にする人が虫明から来て、その人の指導のもとで畑仕事やってた。

小学校3年ぐらい〔から〕当番があるんよね。掃除当番やら、畑の当番やら、いろいろある。おしめ当番もあった。うちの3年生ぐらいのときは、赤ちゃんがちょっと多かったみたい。〔おしめに付いた〕うんこを叩(はた)いて落として。ほんで、二階にあがると、お風呂の洗うところがあるから、そこで洗った。決められた人数が来るはずなんやけど、来(き)いへんのや、みんな。私、なん

かしらんけど、アホなんやねえ。真面目にするから、最後には1人になってん。そんなときに、新潟からおばちゃんが保育所に来て、世話してくれて。そのおばちゃんと一緒におしめ洗いしてた。だからもう、動くのはなんとも思わなかった、その頃は。[おしめ洗いは男の子はやらへん。] 男の子は畑仕事とか。牛とか豚とか飼うてたから、[その] 餌やり。鶏 (にわとり) も飼うてた。鶏の餌もやったことあるわ、私も。

[その頃、保育所には子どもたちが] 何人いたろう。[女の子の] 部屋が4やろ。男の子[の部屋] が4やろ。それに10人ずつ入れてたから、80人は確実におるねえ。下の子らも入れたら、もうちょっとおるかもしれん。下の子らも、よおけおったもの、私、ちっさいとき。で、だんだんだんだん大きくなって、私、あそこで古株 (笑)。

[両親との面会は] 月に1回やったんか、何ヵ月に1回やったんか。グラウンドの金網のところで会うてたんや。そんで、だんだん、金網越しでなしでよくなった。だけど、私は面会が嫌やったあ。もう、面会が嫌で嫌で、親に会いたくなかった。ちっさいときから、親のあれが、愛情がないんや。[ずっと親に] 会わへんできて、物心ついたときに「親です」って言われたって、そんな、親は産んでくれただけやと思っただけで。

[母親は後遺症が] きつかった。プロミン打ってから[らい反応が出て。指なんかも] こんななってるし。ほんで、目はアカベエになってるし。それで髪の毛はもう半分からなかったから。もう私にしたら、会うのが、みんなの視線 (あれ) で恥ずかしかってん。そんだから、面会のときには、いつでも、お母さんが来 (こ) んように、お母さんが来んようにって思ってたぐらい。で、お母さんが来 (け) えへんかったら、ホッとしてた。[面会には] お父さんもお母さんも来るときがあるけど、片方のときもある。

お母さんは、私が何歳[のとき] か知らんけど、[愛生園の] 目医者が「白内障の手術せえ、手術せえ」って。「いやや、いやや」言うてたのに、「せえ、せえ」って言うから、白内障の手術したら、それで目が見えんようになってしもうて。その先生はすぐ辞めて出ていったみたいやけど。先生は、出ていけばねえ、行けるけど、うちお母さんは、もう、かわいそうにねえ、目が見えんし。で、自分[の後遺症] がひどいから、お父さんに言うたみたい。「もっときれいな人と一緒になったらいいやんか」って。私も年がたってから考えてみたら、お母さん、かわいそうやなあと思って。「もっときれいな女の人のところ行ったらあ」って言うたけど、お父さん、それせえへんかってん。あれだけは、えらいなあと思って。[父は] 後遺症ない。普通の人と変わらへん。手がちよっと、こないなって[るだけで]。足が、脱疽 (だっそ) というのかな、なんか知らんけど、足が痛くって切ったみたい。[片方が] 義足。

[島にいるあいだに、自分たちはなんか特別なところにいるっていうのは] わかってた。礼拝堂でお芝居なんか観るときは、私ら健常者と患者さんとが、別々なところで観るわけよね。私らはちよっと高いところだね。患者さんらはちよっと低いとこで。そこで観てたら、うちのお母さんがすぐ手を振るのよ。もう、嫌やなあ、嫌やなあと思ってからに、それで余計に嫌いになるのよね。こっちの[席にいる] 職員のおばちゃんらが、ちっちゃい声で、「あれ見てみ。あれでも、ここの子どもの親やねんでなあ」っていう話、やってんのや。私も小学生[ながらに]、自分らが[この療養所で] 働いてんのに、なに言うてん

のかなあ、やっぱり偏見の目で見てるって、それは感じたことあった。働いてる職員（ひと）はちがうけど、その家族は、私らをちょっと違う目で見てたと思う。だから、〔人に〕言うたらあかなあということは、もう、そこから出てくるわねえ。

〔小学校6年までで〕島から出たのは、岡山の後楽園に遠足に行ったときだけ。それと、邑久郡の本校の学会会を見に行くことがあった。あれが、よかってん。上手やったあ。

〔愛生園の保育所では〕私らのちっさいときは〔世話をしてくれる人は〕「藤田のおかあさん、おかあさん」と言うてた。その人が辞めて、大野〔悦子〕先生になったんや。大野先生になったときは、「大野先生」と言うてた。〔藤田のおかあさんは〕しゃきしゃきしてた。40か50前。わしら子どもの目で見ると、〔正確な年齢は〕わからへんけど。藤田おかあさんはええおかあさんで、「おかあさん、おかあさん」って言うてたのは覚えてる。大野先生になったときは、大野先生は病気のことは、ちょっとあれやったね。やっぱり、ウツルみたいなニュアンスがあったのかなあ。だから、〔私らも親に〕寄りつかんくなつたんやと思うわ。

〔検査やら予防接種やらの痕はいっぱい〕あるで。光田氏反応やら、疱瘡〔の予防接種〕やら。BCGもしたし。「はい、注射しますよお。並んで！」って言うから、それで、ススッて、みんな。なあ。

私、なんか知らんけど、〔保育所の先生たちには〕かわいがられた。そのかわり、みんなに苛められるんや。だから、いつも、ご飯食べんと、戸棚のなかに隠れていた。ほんなら、後片付けする人が「早よ、食べえ。早よ、食べえ。片づかへんから」言うて迎えにきてくれて、嫌々食べに行ったこともある。

でも、子どものときやったら、遊ぶのも楽しかったなあ。うちら、子どものとき、馬乗り。みんなの股（また）のどこを潜（くぐ）ってからに、シャアーっ。と。ほんで、そこ、いちばん前に、こう立ってて。そこに頭を突っ込んで、ほんで、また、そこを潜ってきて。ほて、そこへバァーと乗るわけよ。冬、10畳の部屋んなかで。〔男の子も〕女の子も一緒。ダァーと登って、じゃんけんで勝ったら、また乗るわけ。負けたら馬になる。あんなんを、よおしたわ。あれ、楽しかった。

私、よお考えてみたら、1年、2年って、勉強したような覚えがない。3年ぐらいから、なんか勉強やって。ほんで、できへんわけよねえ、勉強が。ほんならもう、大野先生に怒られて。私だけでなく、みんな。鞭（むち）を持ってるの。鞭で、机、バーンバーンって叩くんや。男の子なんか〔体を〕叩かれたわな。あれは怖かった。

私、勉強がわからへんねん。九九がわからん。時計、見るのが、中学までわからんかってん。「時計見てきて」「何時や?」〔そしたら、両手で時計の短針長針の形をつくって〕こうやって（笑）。ほんまに恥ずかしい。だからもう、中学に入ったら、数学とかあんなん全然できへん。だから、アホやわあと思っただけ。でも、アホはアホで、私、手が器用やから、どうにかなるやろうと思っただけ。もう、そんなんで、生きてきたけどね。

大阪の白鳥寮へ

〔中学にあがるとき〕「長島におったら就職ができへんから、大阪の白鳥寮⁷

へ行きなさい」って急に言われた。〔準備の〕余裕がなかったぐらい。8人ぐらいで一緒に行った。〔男女〕半々ぐらいや。男の職員が連れてきてくれた。

ほんで、〔東淀川区の〕崇禅寺（そうぜんじ）に行くのに、梅田と阪急のあいだの〔交差点を〕渡らにゃいかんわけよね。信号なんか知らんから。〔長島には〕信号ないからね。みんな、ササッと行くんやけど。私も、とろかったんやね。気がついたときは、自動車がビャーと通ってん。もうちょっとで自動車に轢かれそうやった。もう、私、どないなるんかなと思って。じいっとあれしてたら、轢かれんですんだけどね。

〔白鳥寮へ行っても、長島の保育所の〕そのまんまの延長。でも、もう、ここでは〔人に親の病気のことを〕しゃべったらあかん、と思うだけのことで。嫌われるっていうこと、わかってるもん。自然に、自然に、しゃべったらあかん、というのがわかってるから。もう、絶対しゃべらへんかった。——長島の患者さんのところに、虫明から物を売りに来てたひとがおったんよ。ほんなら、そこの子どもが〔この〕病気になったってことを聞いたもん。わたしらも、ああ、ほんならウツルんやなあと思った。〔そやけど〕大人になってからよお考えたら、あれ、リュウマチやいうたって、わからへんのになあと思った。リュウマチの人、みんな、こないなってるものねえ。

白鳥寮、何人おったかなあ。私ら8人〔を含めて〕15、6人とちがうかな。〔私らんときは、みんな中学生以上。〕それから後（ごお）に、小学生が入ってきた⁸。

〔大阪では〕中島中学校〔に通った〕。〔うちらは他の生徒からは〕施設の子や〔と見られてた〕。PTAの会費（あれ）出すとき、みんなは一（ひと）家庭ずつ出すんやけど、私らは4人ぐらいおんなし教室におったから、男の子が〔まとめて〕それを持って行く。「なんで、KSさん、お金、払わへんの！」って言われたこともある。「うーん」っていうて、もう黙ってて。〔でも、親がハンセン病の子どもということとは〕先生方は知ってるやろうけど、子どもらは知らん〔かった〕と思うわ。

〔地域の子らは、白鳥寮の堀の〕外までは遊びに来たけど、家の中には来いへんかった。〔白鳥寮は被差別〕部落の中にできてたの。そんな子らがダァーッと遊びに来て。だけど、悪さはせえへんかった。あそこの子らが、学校に行かんと、遊んでるの見てたら、羨ましいなあ、私ら学校へ行きたくないなあ、いいなあ、この人らは、って。どんなしたら学校へ行かんですむやろかなって、私、ものすごい羨ましかったわ。

〔長島にいたときは教会には行かなかったけど〕白鳥寮に行ってから教会に行った。大野先生がクリスチャンやから。あ、その前も、〔藤田の〕おかあさんもクリスチャンとちがうかなあ。やっぱり、歌うたってから、ご飯食べたりしてた。で、白鳥寮へ行ってから、肥後橋のほうのカトリック教会に行かされた。

〔保母の〕オチさんは、白鳥寮で育って白鳥寮の寮母になった〔人や〕。彼女の親も患者さんやってん。ほんで、私らはオチさんのことを「おねえさん、おねえさん」って言うててんけど。井上課長さんっていうのがちょこちょこ遊びに来て、「あんたらを見てくれてんのに『おねえさん』って言うたらあかん。『おかあさん』って言いなさい」って言うから、ほんなら仕方がないなあって、私はすぐに「おかあさん、おかあさん」って言うてあれしたけど。他の子はなか

なか「おかあさん」って言われへんかった。

美容師になる／秘密を抱えた者同士で結婚

〔中学終わるとき、高校へ行きたいという気持ちは〕なかった。就職がもう大変やったん。はじめは、学校の斡旋。「ここ行きたい」「ここ行きたい」って、みんなが〔求人票を〕取る。私も取ったけど、〔面接に〕行っても行っても、親のことをなんや聞かれると、どこまで喋っていいかがわからへんかってん。施設のことも言われへんし。もう、困ったなあと思って、そこで黙ってるもんやから、やっぱり、落とされる。みな落とされて、最終的には、私一人が残ってしもうた。ほんで、〔職業〕安定所に行って、〔やっと〕印刷会社に就職できたけど。でも、〔白鳥寮の〕おかあさんが「18になったら〔ここから〕出ていかにやいかんからなあ」って言って。「ええっ」言うて。ほんで〔住込みの仕事を探すことにして〕、おかあさんがあっちやらこっちやら頼み込んで、「美容室やったら住込みでいけるから、美容師になったら」ということで、美容師になった。

いま考えてみたら、〔白鳥寮の〕おかあさんもあんどこであれしてるから、頭がなかったんかな。紡績〔会社〕なんかに勤めさしてくれたらよかったのになあと思う。ほんなら給料もいいけどねえ。美容師やったら500円しかもらわれへんかった。住込みでご飯食べるから〔って〕。〔仕事も〕先生の〔家の〕ご飯炊いたり洗濯もしたり〔そういうことまでやらされた。美容師の修行は辛かった〕。長いからね。結婚するまで。25までかな。

〔白鳥寮にいたときは、親に会いに愛生園へは〕行かへんかった。〔代わりに手紙のやりとりは〕してた。やっぱり、そんなんで、いろいろ辛いときがよおけあったから、親に手紙で「なんで産んでくれたんや」と。「産まんかったら、こんなに苦労せんのにい。生まれんかったら、苦労せんのにい」って書いたことある。ほんで、親が嘆いてたみたい。書いてしもうたもんは仕方がない。自分が子どもができて、いやあ、えらいことしたなあと思ったわ。

〔私、白鳥寮で仲良しだったのはNKさん。〕同級生や。あの子は、歯医者さん〔に勤めた〕。給料のいいとこ。苦労はしはったらしいけど。で、二十歳ぐらいのときに、NKさんが「遊園地、行こう」って〔誘ってくれて〕、乗り物に乗せてもらうのがほんまに嬉しかった。あんなん、乗ったことないもんねえ。子どもの頃なんて、行っても見てるだけやからねえ。あれがものすご、嬉しかった。ほんで〔入場料から〕みな出してくれた、あの子が。

〔美容院で働き始めて、両親が愛生園にいることは誰にも言わないできたんやけど〕京都で3回ほど勤めて、そこの先生は、紹介してくれた人が言うたみたいで、知ってた。〔大阪〕歯科大学の梅本〔芳夫〕先生⁹の関係で、通いで行ったとき。

〔結婚は〕おんなし〔白鳥寮の〔男の〕子が「結婚せえへんかあ」って言うてきたけど。私はもう、親が二人〔療養所の〕中に入ってるから、またそれと結婚したら、「子どもがまた病気になったらあかんから、それはもう、嫌や」って言うて〔断った〕。で、NKさんの結婚式に行ったときに、新郎のほうの友達がおったわけ。その友達が、私が明るいから、「結婚する意志があるんやったら、見合いしてくれへんか」って言うてきた。ほんで、私も24か25やから、「ほんなら見合いしてみるわあ」言うて、見合いして。ほんでまた、NKさん、

「Sちゃん、早いこと、進めえや」いうて、タッタカタッタカ、日にちを置かんと、なんやかんやかんやって、1年足らずで結婚の運びになって。主人も30やったからね。ほんで、結婚式に〔相手の〕親が来たら、なんか聞かれるやろなあとと思ってたけど、主人の親もなんにも聞かへんかってん。考えてみたら、このあいだ初めて気がついてんけど、私ら結婚したときから家のことは全然言うてないわけ、お互いが。結婚してすぐ子どもができたりして、忙しかったのもあるけど。なんにも話、してない。子どもが3人できて。あの、どういの、親にちょっとね、手紙、なんか書いたりせないかんからと思って、手紙をテレビのところに置いてて。で、子ども〔の世話〕をしながら、内職してたら、手紙出すの忘れてしもうて。ほな、主人帰ってきて、「おまえ、これなんや？ これ、おまえのお父さんとちがうんかあ」って。私、しまったあ、と思ったけど、もう隠されへん。しゃあない、どうかなるわあと思って、「うん、お父さんやねん」。「おまえのお父さん、死んだんちゃうんかあ」って言うから、「生きてんねん」。こないこないでって、病気のこと話したら、「かまへんやんか、そんなん。おれもじつは、被曝者やねん」て。主人も、長崎の悲惨なことを話した。それまではもう全然、話、せえへんかった。二人が秘密。主人もやっぱり、苦しかったんやろな。どっちのほうが苛酷(あれ) なんか、私もわからへんけど。でも、私も、そんなときまで、ウツル、ウツルと言われるから、子どもがそないなったらどないしよう思うてたもんね。

主人のお父さんは、被曝で死んだ。原爆〔が落ちたあと〕人助けのために〔市内に入っの入市被曝で〕。〔主人の〕お母さんは元気やってん。82歳まで生きてたけどね。〔主人は長崎市から〕一山越えた〔とこにいて〕そんなに被曝というほどでもなかってんけど、〔被曝者健康手帳は〕持ってた。「要らんわあ」って言うててんけど、お母さんが「〔時間が経つと〕被曝のあれを証言(ほしょう) する人がおらんくなるから、取っときい」って言われて。

〔私は、昭和37年、22歳のときに、戸籍を抜いてる。そうしたいって〕私が言うてん。戸籍がおんなしに入ってたなら、「〔親は〕死んだ」って言われへん。就職にも困る。結婚〔のこと〕も考えた。ほんで、お父さんに「〔私の籍を〕抜いて、三重県のほうにしてえ」って言うた。「そやなあ。そうしようかあ」言うて。ほんで、三重県のほうにしてもろうた。私一人の戸籍。ほんでも、親が生きてんのに、死んだって言うの、辛いわ。お母さんが死んだときは、こんなん言うたら悪いけど、ああ、もう、ほんまに死んだって言えるからいいわ、やれやれ、と思ったわ。〔母の葬式のときは、父が〕「おれがもう、みなするから、来んでいい」と言うたから、行かんかったけどね。

〔結婚してからは〕あんまり〔長島愛生園には行っていない〕。〔夫に〕見つかってからは、下2人を連れて、日帰りで行った。だから、みんなみたいに、家族〔内〕で隠し事はしてへんから、楽は楽。〔子どもたちも〕知ってる。〔子どもの結婚相手には〕言っていない。孫も知らん。

〔父は平成13年に亡くなった。〕81か82。胃ガンやったんよね。「話があるから来てくれ」言うて、愛生園(おかやま)に行行って。〔私は〕「80過ぎやから、もう、手術せんでもいいですわあ」って言うたんや、先生に。ほんなら、「医者は見つけた以上は、手術せないかん」て、先生に押し切られて。ほんで、ほかの入所者(どうりょう)が「ほんまは、〇〇さんのこと、手術せんでもよかってんてえ」って。「それを、あの先生は、初めて手術するチャンス(あれ) やか

ら、手術さしてくれえ、さしてくれえって言うてん」。ほんで、お父さんも押し切られて。で、愛生園で手術した。だからもう、言うたら、モルモットみたいなもんや。そのかわり、先生は一生懸命したって。手術してから、ちょっと意識がないときが、1ヵ月近いかな。昏睡状態でずうっと寝てて。ほんで、喉が詰まったら、すぐ切開して。先生も「〇〇さんを殺したらあれやから」言うて一生懸命したみたい。ほんで助かったけど。それから、ちっと惚けだした。

先生は一生懸命やった。だから〔父も〕社会に貢献ができたからいいとちがう。〔その先生はその後〕岡山の病院に行ったといってた。1例でも〔手術〕してたら違うんやろうね、先生の〔技量が〕。そう思わにやいかんなあと思って。

〔父の葬式には一人で行ってきました。園内の人が〕よおけ来てたわ。〔両親のお骨は愛生園の納骨堂に入っている。〕西本願寺にも入ってる。分骨して。

〔今度の家族裁判の話は、愛生園の保育所で一緒だった〕コウちゃんからあった。〔一度は〕「もう、いいわあ」って言うてんけど。それからだいぶん経って、また、「Sちゃん、やりいやあ」言うて。NKちゃんと話して、NKちゃんも「せえへん」と言うてたの。〔ところが〕NKちゃん、話がコロロンと変わってきて、「Sちゃん、しょうやあ」って。「ほな、あんたするんやったら、私もしょうかあ」いうて。〔裁判の原告になって〕もしものことがあったら嫌や、嫌やていうて、逃げてたけど、コウちゃんの説得もいいし、NKちゃんも、コロロンと変わって。

〔国に言いたいこと？〕私、言いたいことない。もう、そのまんまでもういいから。だって、親の愛情がなかったから。ないはないで、こうやって過ごしてきたから。最初から保育所におるから。これが、そのまんまのもんやと思ってるから。隠すことがずうっと続いているから、もう、なんにも思わへん。私、〔差別されたことは〕なんにもないねん。ただもう〔両親のハンセン病のことを〕黙っとかにやいかんだけで。ただ、〔よその子を見て〕きょうだいがおって、仲良くしてる姿見てたら、あ、きょうだいがおったらええなあと思うだけのことで。

〔長島愛生園の保育所で一緒だった人たちの同窓会が始まったのは、前の国賠訴訟に〕勝った後やわ。〔それも〕何年かに一回やな。〔名前は白生会。〕はじめは、よおけ来たけどなあ。だんだんともう、上のもんばっかりになって。若いほうが来んくなった。

若干の考察

「本妙寺部落」の“一斉掃蕩”が1940年、「湯之沢部落」の“解散”終了が1942年。かれらは、けっして“浮浪”していたわけではなく、患者とその家族が助け合ってコミュニティを形成していた。草津の湯之沢部落は、イギリスの聖公会宣教師、コンウォール・リーによる聖バルナバ・ミッションの活動もあって、この地では「聖バルナバ医院」による医療も提供されていた。

熊本の本妙寺部落には、沖縄から九州療養所や星塚敬愛園に強制収容された人たちが“逃走”して住み着いていた。森川恭剛も「近代沖縄とハンセン病差別」（『沖縄県史 各論編 第五巻 近代』2011）で、本妙寺部落狩込みの「直前の状況として、『癪戸数』64戸を本籍地別に分類すると沖縄が断然多く17戸であった。これは九州療養所や星塚敬愛園を逃走した沖縄出身者が本妙寺集落

に移動していたことを示している」(561 頁)と述べている。本妙寺部落でも、中村理登治らをリーダーとする相愛更生会が「患者の自立した自由な共同体の実現」を目指していたと言われる(菊池恵楓園の将来を考える会『ガイドブック 菊池恵楓園』花伝社, 2009)。

国の強制隔離政策が、これらの患者とその家族によるコミュニティの根こそぎの解体を企図し、強行したことの本質的な狙いは、今風に言えば《リプロダクティブ・ライツ》の剥奪であった。

私たち自身が、というっかりしていたのだが、本妙寺部落の掃蕩、湯之沢部落の解散とは、単に「野にある患者たち」を療養所に「収容」するということにとどまらなかった。患者とその家族が共に暮らす生活空間では、子を産み子を育てるかどうかの意思決定が当事者自身に委ねられた状態にあった。強制隔離政策を遮二無二展開しようとする国にとっては、その状態は放置できなかったのである。そのシンボリックな事件が、本妙寺部落と湯之沢部落の強権的解体であった。

ハンセン病患者とその家族から《リプロダクティブ・ライツ》を奪い取っていくことは、このあとも全国展開していったとみるべきであろう。たとえば、島尾ミホ『海辺の生と死』(創樹社, 1974)の一節には、奄美の話として、こうある。ちなみに、島尾ミホは 1919 年生まれ。

癩病患者は人里離れた海岸や、あちらこちらに散在する離れ小島の磯にひとかたまりずつ寄り合って暮していると聞いていましたが、私は舟に乗ってよそ島へ行く時に、ときどき遠目に見ることがありました。そして一度だけ、海端のユナ木の下蔭に住んでいるらしいひと群れをすぐ間近に見たことがありました。長く続くきれいな砂浜の渚に生えたユナ木の枝には洗濯物が干してあり、浜辺では炊事の煙がゆっくり立ちのぼっていて、煮炊きしているらしい女の人の横で、子供たちが賑やかな声をふりまきながら駆け廻って遊んでおりました。また若い女の人が赤ん坊を背負って白い砂浜で貝を掘っているらしい姿なども見えていて、それはよそ見にはまことにのどかな情景に見えました。(15-16 頁, 下線は引用者)

奄美や沖縄では、ハンセン病を発症すると、たしかに既存のコミュニティでの通常の生活を持続することは困難になり、いわゆる「クチャ暮らし」(人目を避けて裏座に隠れ住む)をするか「浜に下りる」ことを余儀なくされていたが、その人里離れた浜では、《リプロダクティブ・ライツ》が実践されていたのだ。強制隔離政策は、そのような当事者の主体性を否認し、ハンセン病患者の子どもに対して「生まれてはならない子として」(家族訴訟の原告、宮里良子の自分史の書名)優生政策の対象としたのだ。

ハンセン病問題で「政策」の語が用いられるのは「隔離政策」と「優生政策」の2つである。ハンセン病患者を一般社会から一掃し「療養所に閉じ込める」ことと、ハンセン病患者の子どもは「生まれてはならない」存在として位置づけたこと。この後者の「優生政策」の局面に、われわれはもっと注視する必要がある。本妙寺部落、湯之沢部落の解体は、一般社会の片隅においてであれ、ハンセン病罹患者たちが集い、助け合って、コミュニティを形成し、子産み・子育てをも含む当たり前の家庭生活を営みうる生活空間の存続を許さない、と

いう権力側の強固な意志の表明にはかならなかったと読み取るべきであろう。

私たちは、『ハンセン病だった私は幸せ』（ボーダーインク、2007）を著した金城幸子に、2018年5月に沖縄県うるま市のご自宅で聞き取りをさせてもらい、じつは彼女と彼女の兄は熊本の本妙寺部落で生まれているという衝撃的な話を聞き、2018年12月にNAからの聞き取り、2019年4月にKSから聞き取りができたことで、事柄のもつ意味が鮮明に浮かび上がってきた。

隔離政策は、単に罹患者を療養所に「閉じ込めた」という問題ではなく、患者とその家族から社会のなかの「居場所」を奪い、「逃げ場」を奪った。——それゆえにこそ、逆説的ながら、自由を奪い、リプロダクティブ・ライツを剥奪する空間である療養所を「安住の地」と倒錯的に表象し、自分たちを閉じ込めた国に感謝の念を抱く者たちも、数多く現れたのだ。

註

- 1 私たちは、栗生楽泉園入所者のその人からも話を聞いている。「湯之沢から保育所へてて楽泉園へ」（『栗生楽泉園入所者証言集（上）』2009、所収）が彼の語りである。ここでも、その語りの掲載にあたって彼が希望した仮名「中村教良」を使用する。
- 2 『風雪の紋——栗生楽泉園患者50年史』（1982）によれば、昭和15年の本妙寺部落の全戸数234、人口713のうち本病患者戸数64、同人口112。本妙寺の患者部落というのは、一般貧困地帯の一部だった。九州療養所長宮崎松記の報告記載では、「七月九日午前五時ヲ期シ熊本県警察部長総指揮ノ下ニ県関係官、熊本南北両警察署及九州療養所職員総数二百二十名ヲ以テ本妙寺癩部落ヲ一斉ニ急襲シテ寝込ヲ襲ヒ水モ洩サヌ検挙ヲ行ヒ身柄ハー応『トラック』ニテ順次九州療養所ニ運び構内ニ在ル警察留置所及当所監禁室ニ収容シ、斯クテ翌々十一日迄検挙ヲ続行残存患者ヲ悉ク掃蕩シ合計百五十七名ヲ一網打尽ニ検挙シテ剰ス処ナカリシハ洵ニ近來ノ快事トシテ慶幸ノ至リニ堪ヘズ」とある。検挙された者のうち、患者〔もしくはその家族〕ではなかった者11名を除いた146名を、星塚、長島、邑久、栗生の各療養所に分散収容。栗生楽泉園には、7月16日、37名（男17、女10、未感染児童10）が送致されてきた。子どもたちは附属保育所へ。女性患者は一般療舎へ。男性患者17名は「特別病室」（重監房）へ。8名は2、3日で出されたが、幹部と見做された9名は、9月11日までの57日間、投獄されていた（158–160頁）。「本妙寺部落役員」が5名、「相愛更生会幹部」が4名であった（501–502頁）。幹部の名前のなかにはNAの父親らしき人は見当たらない。
- 3 NAの母親が栗生楽泉園で亡くなったのは、記録では、昭和18年7月である。
- 4 中村教良は、1935年、長野県生まれ。1940年、病気の両親と一緒に湯之沢部落へ。1942年5月、湯之沢解散で、両親は栗生楽泉園へ、教良は附属保育所へ。発病し、1945年2月に楽泉園に収容。
- 5 記録では、NAの父親が栗生楽泉園で亡くなったのは昭和24年のことである。
- 6 『風雪の紋』の年表によれば、昭和16.5.18、湯之沢部落解散式を挙行、即日移転開始、昭和17年末までに完了することを決定、とある。
- 7 「白鳥寮」関連についての記録によれば、以下のとおり。
 - 1932年1月 大野悦子、長島愛生園の教師に
 - 1933年5月27日 裳掛小学校第一分校である黎明学園開校
 - 1950年12月4日 白鳥寮（財団法人楓蔭会大阪支部）開所式を挙行、10人の保育児童を移す
 - 1950年12月4日 大野悦子、「白鳥寮」主事に（1955年まで）
 - 1951年9月1日 大阪市中島中学校創立
 - 1953年4月1日 白鳥寮の子どもたちが啓発小学校に通学

1955 年 11 月 16 日 愛生保育所閉鎖

1965 年 3 月 3 日 白鳥寮閉園

- 8 早生まれの KS が長島から大阪の白鳥寮に移ったのが昭和 27 年の春。3 年半後の昭和 30 年 11 月には、長島愛生園の保育所は閉鎖となる。この流れのなかで、小学生の子どもたちも、白鳥寮に移されたのであろう。
- 9 梅本芳夫（故人）は、元大阪歯科大学教授。ハンセン病患者への歯科治療奉仕活動を歯学生に呼び掛けた。その活動はいまでも「梅本記念歯科奉仕団」として継続している。

Deprivation of the Reproductive Rights: Reconsideration of the Honmyoji Hamlet Assault & the Yunosawa Hamlet Dissolution

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

Since I (Fukuoka) was commissioned as a member of the working group of the Verification Committee Concerning the Hansen's Disease Problem in 2003, I and Kurosaka have been energetically conducting interviews with recovered Hansen's disease patients and their families. We thought that it was one of the sociologists' tasks to record the interviews with the people who had gone through hardships due to the wrong policies of the government. They may think that newer information would not come when the interviews are repeatedly practiced on same issue and it will reach the stage of "saturation of knowledge." However, we still encounter a completely new life story after having interviews with more than 500 people on the Hansen's disease problems.

The two women introduced in this research note are those who became plaintiffs of the Compensation Lawsuit against the Government by the Family Members of Hansen's Disease Ex-patients that began in 2016.

In December 2018, we interviewed NA (female, born in October 1934, 84 years old at the time of the interview) at a law firm in Osaka. She was a 5-year-old girl on July 9, 1940 when the government arrested the people in Honmyoji Hamlet in Kumamoto. Together with her parents who were suffering from Hansen's disease, she was sent to National Sanatorium Kuriu-Rakusen in Kusatsu, Gunma Prefecture, where she was housed in an attached nursing home.

In April 2019, we had an interview with KS (female, 79 years old at the time of the interview) at a karaoke box near a station in the Kansai region. She was born in March 1940 in Yunosawa Hamlet in Kusatsu, Gunma Prefecture. Her parents were Hansen's disease patients. Half a year later after the "Yunosawa Hamlet Dissolution Ceremony" was held on May 18, 1941, she and her parents moved to National Sanatorium Nagashima-Aiseien in the Seto Inland Sea, and KS was placed in the nursing home attached to Aiseien. She was only 1 and a half years old at that time.

These two were not Hansen's disease patients, but they have experienced "another segregation policy" by being housed in nursing homes attached to Hansen's disease sanatoriums. That is not all. The story of these two women reveals that Honmyoji Hamlet in Kumamoto and Yunosawa Hamlet in Kusatsu were the communities where Hansen's disease patients helped each other and enjoyed reproductive rights to give a birth to their children and raise them with their free will. We can see that the segregation policy was not just an enforced isolation of Hansen's disease patients, but also an attempt to strip the Reproductive Rights from them.

Keywords: Hansen's disease patients' family, Segregation Policy, attached nursing home, life story